

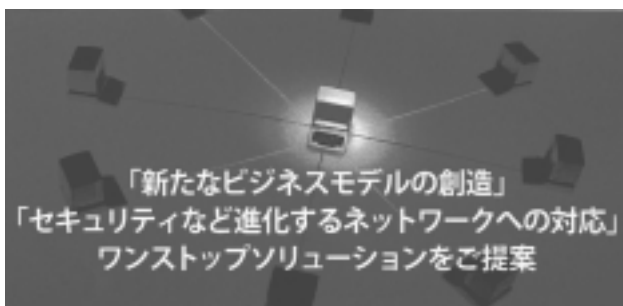


痛風の今井です。かぜのはなし。

こんにちは。赴任し半年経過しましたが痛風発作はおきていません。季節は寒くなる一方と思われるので、皆様どうかご自愛ください。

今回はかぜに関して。ところで「かぜ」って何でしょうか。かぜは基本的にはウイルスが原因の上気道炎であり、咳・鼻汁・痰・頭痛・関節痛など症状は多岐にわたります。これから流行を迎えるだろうインフルエンザもかぜの一種です。インフルエンザウイルスに有効なウイルス薬(使用により解熱が1日程度早くなるといわれる、よって必ずしも使えば良いというわけではない)はありますが、一般的なかぜを起こすウイルスに有効な薬は平成25年10月末日現在存在しません。ですので、私はじめ医師はかぜのように見える他の疾患群を除外し、かぜと診断します。そして一般的には少しでも症状が和らぐような薬(鎮咳薬など)を処方します。良く「早めの〇〇」とテレビCMで感冒薬が宣伝されていますが、それを飲んだからといって(僕らが出すいわゆるかぜ薬を飲んだところで)病気が治るわけではありません。体の免疫機能(病原と闘ってくれる体の仕組み)で自然に良くなるのがほとんどです。免疫機能が上手く働いていると、多くの場合、熱が出ます。熱が出ない時はむしろ心配です。人間が死に近づく場合、体は冷たいのです。発熱は体の必要な反応であるため、解熱薬は慎重に用います。特に熱を産生するのが苦手な小児や余力のない高齢者は低体温になる方が心配です。かぜに限らず、なにかしらの感染症の経過をみるときは体温で評価しない方がいいです。人間として当たり前なこと(意識は良いか、呼吸の様子は平気か、食事や水分は摂取できるか)に着目した方が良いと思われます。体温のみかたを医療従事者含め多くの方は誤解しています。

また熱≡抗菌薬(抗生物質)という考えもありえません。抗菌薬自体で熱を上げることはあっても、熱を下げることはできません。菌を殺すことしかできません。使用する際は、感染臓器と原因細菌を推定もしくは特定する必要があります。かぜからの細菌感染予防目的に抗菌薬が処方された時代はありますが、根拠に乏しいと思われます。そもそも薬全般に言えることですが、抗菌薬を使うことにはリスク(アレルギーや下痢など)があります。心停止させる副作用もあります。そんな怖いリスクを上回ってでも、使用することで患者に幸がもたらされると判断されない限り使用しません。ただ、かぜのようなコモンな疾患ほど判断に難しいことは事実です。頻度の多い気管支炎・肺炎との見分けが難しい場合も少なくありません。かぜという診断を100%正しいと言える医者を僕は知りません。たぶん、世の中にはいません。断言できる医者ほど信用しない方がいいと思われます。頻度は少ないものの、のどが痛い心筋梗塞や急性喉頭蓋炎・髄膜炎初期・膿瘍疾患などかぜのようにみえてかぜでない疾患も多くあります。咳が止まらない?と置いていたら心不全であった症例もあります。経過を観察し症状がどのように変化するか(新たな症状がでてくるか、自然に良くなっていくか)を見守ることが必要です。かぜと同様に急性胃腸炎と診断された際も注意を要します。特に下痢がない場合には...。その話は紙面の都合上また今度。



FUJITSUパートナー

扶桑電通株式会社

■青森営業所 青森市長島二丁目13番1号
TEL 017-775-2031(代) FAX 017-774-4720

■八戸営業所 八戸市三日町2(青銀明治安田生命ビル)
TEL 0178-44-1855 FAX 0178-44-8494

《ホームページアドレス》
<http://www.fusodentsu.co.jp>